

名古屋学芸大学「データ数理・AI 教育プログラム」
2025（令和 7）年度 自己点検・評価結果

1. プログラムの修得状況について

2025 年度学科別修得者数

学科/専攻名	修得者数（数）
管理栄養学科	3
映像メディア学科	2
デザイン学科	7
ファッション造形学科	0
子どもケア専攻	0
幼児保育専攻	0
児童発達教育専攻	0
看護学科	0
合計	12

2. 学修成果について

「情報社会の基礎」では、対面授業では今年の学生肯定評価率 62.7%（昨年 52%—昨年 46.2%）、オンデマンド形式のクラスでは 62.7%（昨年 45.9%—昨年 52.6%）であった。対面形式、オンデマンド形式ともに大きく伸びた。

「データ数理演習」では肯定評価率 33.3%（昨年 63.6%）、強い肯定評価率 0%（同 21.2%）であった。昨年に比較して 30%以上の大幅な低下となった。

3. 学生アンケート等を通じた学生の内容の理解度について

「情報社会の基礎」では、授業内容をよく理解できたと考える学生の割合は 34.3%、ある程度理解できた者は 46.3%、全体では 80%以上の学生が一定の内容理解を実感していることが分かった。

「データ数理演習」の場合、よく理解できたと考える学生の割合は 100%であった。これは受講生が少ないため、授業も丁寧に進行できたことが大きい。

4. 学生アンケート等を通じた後輩等他の学生への推奨度について

直接的な評価項目は設けていない。推奨度を測る目的は、学生の達成実感及び学びの継続性を評価するためと考えられるため、本学では類似設問「学習をさらに深めたいと感じるか」という項目を利用する。

「情報社会の基礎」では、強く思う学生が 37%、やや思う学生は 35%であった。

「データ数理演習」では、強く思う学生は 0%、やや思う学生は 100%であった。

内容が学生の専門とは異なる部分が多いため、継続して学ぶという意味ではやや尻込みする学生が多くなるようだ。

5. 全学的な履修者数、履修率向上に向けた計画の達成・進捗状況について

本年度は、「情報リテラシー」、「表計算演習」、「情報社会の基礎」、「データ数理演習」の授業でMDASHについての説明を行った。

6. 教育プログラム修了者の進路、活躍状況、企業等の評価について

本学のキャリアサポートセンターが毎年実施している、卒業生の就職先企業等を対象としたアンケートを通じて、本プログラムの評価を把握する。同時に、本プログラム修了者の進路状況を確認していく。今後は、本プログラムの対象学生が卒業を迎える2028年度に向けて、具体策を検討する。

7. 産業界からの視点を含めた教育プログラム内容・手法等への意見について

毎年8月に開催される「三つのポリシーに基づく自己点検・評価改善に関わる外部機関等との懇談会」において、外部の評価委員より意見を聴取している。今後はこの場を活用し、本プログラムの内容や手法についても広く意見を求める予定である。

8. 数理・データサイエンス・AIを「学ぶ楽しさ」「学ぶことの意義」への理解について

「情報社会の基礎」では、肯定評価率の大きな向上は、なるべく平易で分かりやすく、学生にとっても親しみやすいテーマから話題を起こすなど内容に工夫をこらしてきた結果と捉えてよいだろう。学生コメントでも授業の良い点として「話の分かりやすさ」を挙げるものが多くみられた。

「データ数理演習」では数理的な内容を丁寧に学習できたようであるが、昨年と比較して肯定評価率は大きく低下した。だが、講義内容から見てむしろ妥当な数値に近づいたのではないだろうか。昨年からの反省もあり、学生自ら考える時間がある程度増やしていったのだが、それも低下の一因と推測される。このように評価は低下するが、学生が自分自身で考える時間は「学ぶ楽しさ」「学ぶことへの意義」においても、とても重要であるため、さらなる時間の確保が必要と考える。現状はまだ、教員の解説と操作の説明への比重が高く、学生はその操作をなぞるような作業が多いため、真の意味での「学ぶ楽しさ」「学ぶことの意義」への理解には至っていない。

9. 内容・水準を維持・向上しつつ、より「分かりやすい」授業運営について

情報社会や数理的な問題解決に対して興味があり、真面目で積極的な学生が参加する傾向がある。このため、教員の解説や説明はしっかりと聞き、取り組む学生が多い点は喜ばしい。今後、学生にとって身近になる良い練習問題・課題をさらに増やし、学生自ら考えるということに喜びを見出せるような授業が必要になると考える。そのようなコンピテンシーこそが数理的な要素を加味した意思決定ができる人材を育てていく。